

淡路国風土記散歩 1

淡路の渡来関連遺跡を歩く（前）

寺岡 洋

淡路国 松帆の浦 野島海人 御食国

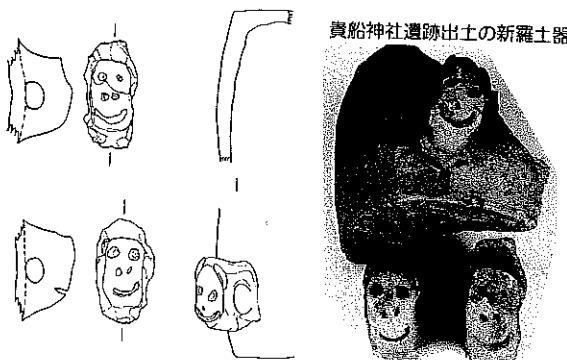
淡路島の遺跡からも注目される渡来系遺物や遺構が調査されており、紹介したい。

兵庫県は律令制下の旧国名で言えば、但馬、丹波、播磨、摂津、そして淡路の五ヶ国からなり、淡路は津名・三原郡の二郡の小国。ご存知のように瀬戸内海の東端に位置する島で、この地政的な立地が淡路の遺跡の特徴とも言える。

7月中旬、淡路・阿波の遺跡を見に出かけ、明石海峡を渡った。明石海峡は古来交通の要衝。天平八年（736）の遣新羅使も明石の浦に船を浮かべ、淡路島を眺めている。平安時代初期、承和（じょうわ）十二年（845）に播磨國明石浜と淡路國石屋浜との間に渡舟の制が施行されたとあるが、むろんもっと古くから往来があった。明石海峡を眼下にする兵庫県最大の前方後円墳・五色塚古墳（全長194m）の墳丘を覆う葺石は淡路島から運ばれたらしい。

島の北端は松帆（まつほ）の浦。百人一首の選者・藤原定家の「来ぬ人を 松帆の浦の 夕凧に 焼くや 藻塩の 身もこがれつつ」で知られるが、本歌は笠金村の「名寸隅（なきすみ）の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝凧に 玉藻（たまも）刈りつつ 夕凧に 藻塩（もしょ）焼きつつ……」（『万葉集』巻六・935）。神龜三年（726）、笠金村が聖武天皇の播磨國印南野（いなみの）行幸に從駕した際に詠んだ歌なので松帆の浦は遠望したであろう。ただ、奈良時代の製塩は「藻塩焼く」というような詩的なものではなかったようだ（『古代製塩の島 淡路』洲本市立淡路文化史料館 2001）。

淡路島の西浦（播磨難治い）、貴船（きぶね）神社遺跡のある野島（のじま）もまた『万葉集』に歌われる。山部赤人の、「朝凧に 梶の音聞こゆ 御食（みけ）つ國 野島の海人（あま）の 舟にしあるらし」には野島海人と御食国がセットで登場する。御食国は天皇の食料、神に供える御饌（みけ）を司る国。



貴船神社遺跡出土の新羅土器

『延喜式』にも「御贋（みにえ）」を納める国として若狭・志摩・淡路国などが挙げられ、月次祭（つきのみさい）に用いる塩は「淡路塩」だったそうだ（図録『御食国・淡路』兵庫県教委 2006）。

貴船神社遺跡（淡路市野島）

その淡路の特産品である塩を弥生時代末期（庄内期）から奈良時代まで継続して作りつけたのが貴船神社遺跡。松帆の浦から4kmくらい南下すれば道の傍らに、「縁のみちしるべ」という公園になって遺跡が保存されている。遺跡の山側の崖は、1995年に大地震を引き起こした野島断層が露出していた場所である。報告書により紹介したい（『貴船神社遺跡』兵庫県教委 2001）。

この調査では古墳時代後期から奈良時代（6世紀末～8世紀）の22基の石敷き製塩炉と、鹹水（塩分濃度を高めた海水）を作るため使われた数基の土坑が確認された。周辺には被熱した礫群が多量にあり、炉の数は数倍になると推定される。

この当時の塩作りは、藻ではなく砂に塩分を付着させたらしい。塩分を付着させた砂を木の箱（タレフネ）に入れ、海水を注ぎ、底部から鹹水（かんすい）をとるという採鹹方法。次いで、この鹹水を土器に入れ、石敷きの製塩炉で加熱しシャーベット状の塩にする煎熬（せんこう）工程がある。この時に使われた製塩土器は壊されるので、貴船神社遺跡では膨大な量の土器片が出土している。この粗塩（あらじお）をさらに丸底の土器に移して再加熱して堅塩（かたしお）にし、土器にいたまま消費地へ運んでいる。淡路で作られた焼塩用の製塩土器は特徴があり、平城京などでも出土しているそうである。

韓式系土器 移動式竈 新羅土器

塩にこだわったが、遺跡の山側の斜面には集落や

古墳が存在したと推定され、韓式系土器や新羅土器が出土した。

「韓式土器」については詳細が分らないが、甌(こしき)がそれにあたるのであろうか。また、「カマドの破片は大きく、ある程度の量もあるが接合できなかつた。各部分があるようである。……」とあるので、移動式竈も出土しているようである。

移動式竈と甌がセットで見られるのであれば、海人集団に渡来人が編制されていた可能性も考えられる。舟で海を渡ってきたのであるから、航海には習熟している。それに、遣唐使船に新羅人が水先案内人として乗船したように、海人集団にパイロット役の渡来人がいてもおかしくない。古墳からの出土品と思われる多くの釘と鎚(かすかい)、小形(長さ6.1cm)の鉄斧なども渡来系文物と言える。

奈良時代のものと推定される新羅土器は樽型の土器で、2個一対の把手が付いており、その把手に一見猿のような顔が描かれている。新羅の土偶(どぐう)には猿も見られるが、このような変わった土器は知られていない。

このように貴船神社遺跡では遺物から、6世紀代には渡来人の居住の可能性、奈良時代においても交流していたことがうかがえる。それにしても現在、朝鮮半島で製塩土器・製塩遺跡が見られないのが不思議であり、どのようにして塩を入手したのであろうか。倭国との交易という説もあるが。

なお、2004年に野島の南、富島(としま)港周辺の畑田遺跡で野島海人の拠点とされる集落跡が調査されている(「北淡町広報」2004.8.)。

淡路市北淡歴史民族資料館(淡路市浅野)では、「海あがり」と呼ばれる底引網に掛かったタコツボなどが大量に展示されている。もちろん製塩土器も。

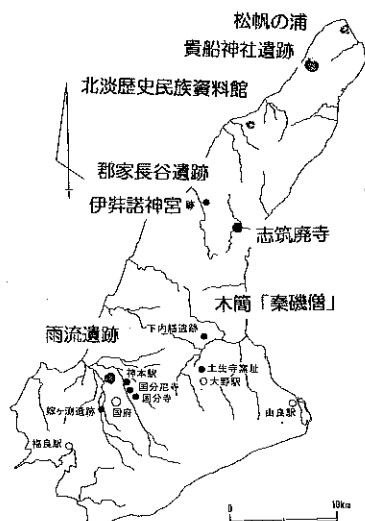
郡家長谷遺跡 伊弉諾神宮

西浦を南に下り郡家(ぐんけ)で東浦(大阪湾岸沿い)に向う。郡家の地名は津名郡の郡衙(ぐんか)所在地であったことによる。郡衙推定地の上を通り過ぎたが場所は分りにくい(「郡家長谷(ぐんげながたに)遺跡—第4次調査—」『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』津名郡町村会 2001)。

遺構は明確でないが、規則的に配置された規模の大きな掘立柱建物が想定され、区画溝の存在、出土遺物の時期が飛鳥～奈良時代に集中し、蹄脚円面硯

などの出土から郡衙跡と推定されている。

ちょうど郡衙推定地と郡家川を挟んで対岸に伊弉諾神宮が鎮座する。淡路の一ノ宮で、延喜式の名神大社。地元では‘いっくさん’と呼んでいる。



津名郡唯一の寺院が志筑(しづき)に造られている。郡家・志筑の間は地溝帯になっており交通の便もよく、津名郡衙と志筑廃寺の造営者は密接な関係が考えられる。報告書により紹介したい(『志筑廃寺 発掘調査報告Ⅰ』津名町教委 2004)。

志筑廃寺の場所も分りにくい。目標になるものが無いが、丘陵を開発した新興住宅地に接する。現状は竹藪と棚田に造成された水田。

この低い丘陵上に立地するのは意味ある。志筑の街は古代には大部分入江・湿地帯であったと復原されており、東浦の津・泊であったようで、舟からいちばん目立つところに建てられている。津名郡家(ぐうけ)への道も寺の前を通る。

志筑廃寺の創建年代は、7世紀末～8世紀初頭の藤原宮期とされる(土器様式: 飛鳥IV～V)。出土した複弁八葉蓮華文の軒丸瓦は、藤原宮の瓦と同じ範(型)を使って作られていた。持統天皇の宮殿と同じ文様の軒丸瓦を使っていたことになる。藤原宮の軒丸瓦は洲本市に所在する土生寺(としょうじ)窯でも焼かれており、志筑廃寺の造営者には土生寺窯の経営にあたった人物も関わったと思われる。

寺院の遺構は、「丘陵下で検出した門とそれに伴う板塀と考えられる柵列」のみであるが、基壇に使われたと思われる凝灰岩の破片が多く出土しており、大量の瓦の出土ともあわせ礎石は確認されてい

ないが金堂や講堂が建てられていたであろう。

寺域が丘陵に掛かっており定型的な法隆寺様式というような伽藍配置でなかったかもしれない。また、過去の地震により大きく地滑りを起していることも分りにくくしている。

志筑廃寺の創建者 ミヤケ

志筑廃寺の創建者（檀越）であるが、殆どの廃寺がそうであるように不明としか言えない。

周辺に群集墳や終末期古墳も存在しないので（資料集『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 2007）、寺院を建立するほどの有力な集団が見当たらない。となると、製塩に従事した海人集団と瓦生産に関わった瓦工集団を統括していた在地の首長・郡領層が結集して建築したのである。古代寺院の多くは一氏族の氏寺というよりは、在地有力者の共同作業とみなせる智識（カンバ）による寺、「智識寺」という性格を持つようである。

報告書に廃寺所在地の地名として、「三宅谷池（臨池庵池）」とあるのが気になる。『日本書紀』仲哀紀には「淡路屯倉（みやけ）」が記されるが、このミヤケは三原郡の幡多（はた）に比定されている。三宅谷池の名称からミヤケを連想するのははなはだ危ういが、塩の貢納を主目的とするミヤケを淡路に想定するのは許されるであろう。「欽明紀」に記される吉備の児島屯倉（みやけ）や紀伊の海部屯倉では製塩とも関連したとされる。そして、ミヤケの管理・運営にヤマト王権より派遣された渡来系集団が関わった例は多くある。

志筑津あるいはミヤケと関連する集落として廃寺の北に立地する天神遺跡が注目される。6世紀後半～7世紀初頭の集落で、「一般集落とは性格を異にする」とあり、調査が期待される。

雨流遺跡（南あわじ市松帆志知川）

志筑の南には安乎（あいか）の集落があるが、平城京出土木簡に「淡路国津名郡安乎郷 戸主磯秦僧」が見られる。「磯秦」という人名は他の資料に見られないが、秦氏の複姓ではないか、と思われる。

津名一宮 IC から高速道に乗り、西淡三原 IC で下りる。この ICあたりが雨流（うりゅう）遺跡になる。渡来系集団の移住の痕跡が色濃い三原平野の拠点となる集落である。以下、報告書による（『雨流遺跡』兵庫県教委 1990）。



雨流遺跡は弥生時代前期～江戸時代まで重なるが最も特徴的な古墳時代中期、5世紀中葉以降に属する鍛冶集落を紹介する。遺構は、竪穴住居跡12棟、掘立柱建物跡3棟、鍛冶遺構（鍛冶炉3基、廃棄土坑数基）、土坑、流路、溝など。

鍛冶については報告書に大澤正己氏による「楕形鉄滓と鍛造剥片の金属学的調査」があり、

- i) 成分調整の精錬鍛冶（大鍛冶）と鉄器製作や修復の鍛錬鍛冶（小鍛冶）の両者を行なっていた。
- ii) 楕形鉄滓での数量は大小合わせて197点であり、大規模な鍛冶である。
- iii) 鍛冶作業に伴う鍛造剥片も検出した。

とある。鍛造剥片は赤熱した鉄素材の表面が酸化を受け、鍛打時点で剥落した鉄の薄膜酸化物。

遺物については、初期須恵器や韓式系土器が出土している。「韓式系土器としては甕・鉢・鍋・甌といった器形が出土しており、……高い確率で渡来人の居住を推定できる集落で、…（周辺に広がる韓式系土器出土遺跡は）雨流遺跡を拠点とした渡来人の移動ととらえておきたい」と評価されている（定松佳重・谷口梢「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究 IX』韓式系土器研究会 2006）。「土師器甕」を写真で見ると、壺の底部と焚口を切り取ったような形をしている。雨流の甕が壺を転用したかどうか不明だが、明石では転用甕が見られる（『明石市文化財年報 昭和12年度』明石市教委 2002）。広く使われていたかもしれない。

雨流遺跡は5世紀代という早い段階に、ヤマト王権が淡路経営のため送り込んだ渡来系集団の拠点であったと考えられる。そして、鉄器生産や淡路ミヤケの中核になったのである。